Research Monograph Series

座の生成論

——生成学における構造化された空位・型・位・無名性——

The Generative Ontology of Za: Structured Vacancy, Kata, Position, and Namelessness in Generative Studies

Author: Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha)
ORCID: https://orcid.org/0009-0009-3796-5889
Affiliation: Sayama Aesthetics School / Institute of Aesthetics
Version: 1.0
Last Updated: July 2026
Status: Ongoing Research

Research Monograph
Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha)
Version 1.0, July 2026

Publication Information

Copyright

© 2026 Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha). All rights reserved.

License

This work is distributed as a Research Monograph.

No part of this publication may be reproduced, distributed, or transmitted in any form or by any means without prior written permission of the author, except for brief quotations used in academic review or scholarly citation.

Suggested Citation

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). 2026.

The Generative Ontology of Za:
Structured Vacancy, Kata, Position, and Namelessness in Generative Studies

Research Monograph Series, Version 1.0.

Sayama Aesthetics School / Institute of Aesthetics.

Research Monograph

Version: 1.0

Last Updated: July 2026

Status: Ongoing Research

要旨

本稿は、日本文化史において座席、地位、集会、祭祀組織、同業者組織、芸能集団、共同制作の場を意味してきた「座」を、生成学および生成の位相存在論の内部で再構成する。ここで座は、既成の人間が集合する単なる場所または組織ではない。座とは、異質な存在者が反復可能な型を介して関係し、占有者に還元されない位を生成し、その応答を次の生成へ継承する、時間的・身体的・制度的な関係位相である。本稿はこれを「構造化された空位」と定義する。

神座、宮座、中世商工業座、猿楽座、連歌・俳諧の座を歴史的に区別しながら、それらに認められる場所設定、参与規則、役割配分、反復、継承および排除の構造を抽出する。さらに、「印―型―形―座―位―無名性―文化生成」という生成学上の連鎖において、座が個別的な形を共同的・超個人的な位へ変換する中間位相であることを示す。そのうえで、開かれた座と閉じた座を区別し、座を日本文化の調和的本質として理想化するのではなく、生成と排除の双方を生みうる両義的構造として論じる。

キーワード

座、生成学、生成の位相存在論、型、位、構造化された空位、無名性、作品性、文化生成

目次

Contents

方法上の注記……1
1 問題設定……1
2 座の歴史的諸相……2
3 座の生成学的定義……3
4 場・座・位の区別……3
5 印・型・形から文化生成……4
6 人間以前性・自己以前性・作品性……4
7 位の超個人性……5
8 開かれた座と閉じた座……5
9 芸術実践と現代的展開……6
10 座の生成論の基本命題……6
結論……7
参考文献……8
方法論的声明……9

方法上の注記

本稿は「座」の語に時代を超えた単一の日本的本質が存在すると主張しない。神座、宮座、商工業座、芸能座、文芸の座は、それぞれ異なる歴史的制度である。本稿の方法は、それらを同一視することではなく、異質な用例の間に現れる関係構造を比較し、その構造を生成学の二次的概念として再記述することにある。

したがって「構造化された空位」は歴史学上の既成概念ではなく、史資料から抽出された特徴を説明するための生成学上の術語である。

1　問題設定

「座」は、座る場所、人物の地位、人々の集会、神仏を奉安する場所、商工業者の組織、芸能集団、劇場などを意味してきた。辞書的多義性の内部には、少なくとも「場所」「集合」「位置」「規則」「反復」「継承」という複数の契機が共存している（『日本国語大辞典』「座」）。

従来の研究では、座は祭祀共同体、同業組合、芸能組織または共同制作の形式として個別に論じられてきた。しかし、それらの用法を横断して、座がどのように人、物、身体、時間、規則および超越的なものの関係を生成するのかは、十分に存在論化されていない。

生成学の基本命題は、「関係が存在に先行し、存在は関係の結果として現れる」というものである（田中 2026a）。この立場から見れば、座に参加する以前に、完成した個人と固定された役割が存在するのではない。人は座の内部で応答し、位置づけられ、また座を変形することによって、その都度の存在として生成される。

本稿の問いは次のように定式化できる。

座はいかにして、個人に先行する位を準備しつつ、個人の実践によってのみ現実化されるのか。また、座はいかにして型を継承可能にしながら、閉鎖、独占、排除を生むのか。

2　座の歴史的諸相

2.1　座席と神座

座の最小の意味は、身体または事物が置かれる場所である。ただし、それは幾何学的座標ではない。座席は、上座と下座、中心と周縁、主人と客、演者と観客などの差異を生成する。身体が置かれる以前から、その場所には振る舞いの可能性と制約が組み込まれている。

神座は、神社本殿内で神を奉安する場所と定義される（神社本庁「神座」）。歴史的信仰を「空席が神を作る」と還元することはできない。しかし生成学的には、神座は、不可視のものが関係可能になるために、場所、儀礼、物質、身体動作および時間を構造化する装置として理解できる。座は存在を所有するのではなく、存在が現れうる関係条件を保持する。

2.2　宮座と共同体

宮座は、一定地域において当屋制を原理とする神社祭祀組織として研究されてきた。上野和男は、その内部に家相互の平等性・対等性が認められる一方、外部に対しては封鎖性と排他性を持ちうることを指摘する（上野 2011）。

ここには座の基本的両義性が現れている。座は内部の役割を循環させ、共同性を生成する。しかし同時に、誰が参加資格を持つかを規定し、外部を生成する。座の共同性は、それ自体として開放性を保証しない。

2.3　商工業座と芸能座

中世の商工業座は、朝廷、寺社、権門などとの関係を通じて営業上の特権を獲得した組織であった。構成員間に相対的平等性を持ちながら、入座制限と独占権によって外部への閉鎖性を形成した例も多い（山川出版社「座」）。

猿楽の大和四座は、後の能楽諸流へつながる演技、役割、伝承の組織となった（日本芸術文化振興会「大和四座」）。ここで継承されるのは個々の作品だけではない。演者、役柄、稽古、演目、観客、寺社、後援者を結ぶ型そのものが継承される。

2.4　連歌・俳諧の座

連歌は、複数人が一堂に会して句を詠み継ぎ、一つの作品を生成する文芸である。そこでは、個々の句の完成度だけでなく、前句への応答、次句への開放性、全体の運行、座における振る舞いが重要となる（大阪大学日本文学研究室; 尾形 1997）。

作者は固定的な起源ではない。作者は一時的に作り手となり、次の瞬間には読み手または応答者となる。作品全体は、いずれの一人にも還元できない。この構造は、後述する作品性と無名性の重要な先行形態である。

3　座の生成学的定義

以上を踏まえ、本稿は座を次のように定義する。

座とは、異質な存在者が反復可能な型を介して関係し、占有者に還元されない複数の位を生成し、その応答と変形可能性を未来へ保持する、構造化された関係位相である。

この定義には七つの契機が含まれる。

第一に、身体、物、建築、自然、制度またはデジタル環境による場所の設定がある。第二に、参加と離脱を規定する境界がある。第三に、振る舞いを反復可能にする型がある。第四に、役割や発言順序などの位が配分される。第五に、参加者間または人間と非人間の間に応答が生じる。第六に、現在の占有者が去った後にも座が継続しうる。第七に、応答によって規則と位の双方が変形されうる。

「空位」とは、誰も座っていないという経験的状態ではない。それは、ある位が現在の占有者によって存在論的に汲み尽くされていないことを意味する。位は継承可能であり、同時に次の占有によって変形可能である。この未完了性を保持する空位が構造化されているため、座は世代と個人を越えて持続できる。

4　場・座・位の区別

「場」は、関係が発生しうる可能性の総体である。そこには身体、自然、物質、制度、過去の痕跡および未来の可能性が重なっている。

これに対して「座」は、場の可能性が型、配置、参与および反復によって具体的に編成された位相である。場が潜在的な関係可能性であるなら、座はその組織化された作動である。

「位」は、座の内部で一時的に安定した関係上の位置である。位は人の属性ではない。人は位に入り、位を担い、位によって変化し、同時に位の型を変える。

この意味で、座は場と位の中間に位置する。

場は関係を可能にし、座は関係を編成し、位はその関係を一時的に安定させる。

5　印・型・形から文化生成

生成学における系列は、次のように精密化できる。

「印」は差異が知覚可能になる最小の痕跡である。「型」は、その差異を反復可能にする存在論的構成である。「形」は、型が個別の物質、身体、行為または作品として感性的に現れたものである。

しかし形が一度現れただけでは文化にはならない。形が他者によって受け取られ、反復され、修正されるためには座が必要である。座の内部で、作者、演者、観客、師、弟子、主人、客などの位が生成される。反復が個人の所有を越えて継続すると、生成主体は複数の人間、物質、時間および制度へ分散する。この状態が無名性である。

したがって座は、個別的な形を超個人的な文化生成へ変換する中間位相である。

印―型―形―座―位―無名性―文化生成

この系列は単線的な発展段階ではない。文化生成は新たな印と型を生み、再び座を形成するため、全体は再帰的に循環する。

6　人間以前性・自己以前性・作品性

『人間以前性と自己以前性』において、人間以前性は、身体、呼吸、重力、季節、成長、腐敗、物質、環境および時間のように、「人間」という概念に先行しながら現在も作動している生成条件として定義された。自己以前性は、社会的に固定された自己に先行する感覚、方向、判断、身振りおよび創造可能性である（田中 2026c）。

この観点から見れば、座は人間だけの社会的集合ではない。連歌の紙、能舞台の床、盆栽の樹勢と季節、壁面と塗料、ウェブ画面と通信遅延、建築と生活時間も座の参与項で

ある。それらの抵抗と応答を通じて、自己以前性は初めて自己に現れ、自己証明が生じる。

作品性とは、完成物の属性ではなく、作品が新たな関係を生成し続ける能力である。無名性も作者名の消去ではない。名のある作者を含みながら、生成の起源を作者一人に閉じず、型、素材、場所、受容者、後続者および時間へ分有させる存在様式である。

7　位の超個人性

皇位は、位が現在の担い手より長く持続することを示す限界事例として考察できる。「即位」が人物の本質的属性の獲得ではなく、継承される位への就任を意味することは、位が占有者に還元されないことを明瞭に示す。

ただし、この構造分析は、皇室制度または政治的階層を正当化するものではない。また「シラス」を所有ではなく全体との関係を保持する構造として読む場合も、それは確定した歴史語義の主張ではなく、生成学上の哲学的再構成として限定されなければならない。

重要なのは、位が超個人的であることと、位の制度が正当であることを区別することである。座の生成論は、位の継承構造を明らかにすると同時に、その位が誰を排除し、誰に責任を負わせるかを問う。

8　開かれた座と閉じた座

座には生成的方向と閉鎖的方向がある。

閉じた座では、型が所有物となり、入座資格が固定され、位が人格または血統と同一視され、外部からの応答が遮断される。そこでは反復は継承ではなく複製となり、座は自己保存の装置へ変化する。

開かれた座では、型は保持されるが、その適用と解釈は応答によって更新される。位は必要であるが、占有者と同一化されない。外部者、後続者、自然、物質および予期しない出来事が、座の構成を変えうる。

座の開放性は、境界がないことではない。次の四条件によって判断される。

1. 参加資格と規則が批判可能であること。

2. 位が私有化されず、継承または再配分可能であること。
3. 外部および非人間的存在からの応答を受け取れること。
4. 誰が決定し、誰が結果を負うかが追跡可能であること。

9　芸術実践と現代的展開

美学者母の実践において、グラフィティは壁面、都市、書き手、通行者、法制度、天候および消去の時間からなる座を形成する。タグという名は個人を示す一方、その痕跡が都市の応答へ渡されるとき、名は無名的な文化生成の一部となる。

盆栽では、人間が一方的に形を与えるのではない。樹木の成長、枯死、季節、剪定、針金、鉢および鑑賞者の時間が座を形成し、人間の意図は植物の応答によって修正される。

Web Installationでは、作品は画面内の画像に限定されない。URL、ドメイン、検索、QRコード、端末、身体移動、物理的場所および通信環境が分散的な座を形成する。狭山美学校／美学研究所も、建物そのものではなく、生活、滞在、制作、作品、道具、訪問者および時間が関係を更新し続ける長期的な座として理解できる。

デジタル・プラットフォームも座を形成するが、参加の位が評価指標とアルゴリズムによって不可視に配分される危険がある。接続数の増加は座の開放性を意味しない。身体、場所、責任および現実からの抵抗が失われれば、座は記号が記号だけを評価するデリバティブ空間となる。

10　座の生成論の基本命題

1. 座は容器ではなく、関係を生成する位相である。
2. 座は個人の集合に先行して、参与可能な位を構成する。
3. 位は占有者に還元されず、占有によって変形される。
4. 型は座を反復可能にし、応答は型を更新する。
5. 座には人間だけでなく、物質、自然、制度、技術および時間が参与する。
6. 無名性は名の欠如ではなく、生成主体の超個人的分有である。
7. 座は開放性と排他性を同時に生成しうる。
8. 文化は、座が自己を変形しながら再帰的に継承されるときに生成する。

結論

座は、日本文化に固有の調和的共同体を示す語ではない。それは、位置を準備し、身体を配置し、型を反復し、位を継承する一方、境界、特権および排除をも生成する両義的な関係構造である。

生成学において座を「構造化された空位」と捉えることにより、個別の形がいかに共同的実践へ移行し、位と無名性を経て文化生成へ至るかを説明できる。座の本質は、誰かがそこを占有していることではない。現在の占有を越えて、次の応答と変形を受け入れる関係可能性が保持されていることにある。

参考文献

* Bourdieu, Pierre. 1977. Outline of a Theory of Practice. Cambridge University Press.
* Goffman, Erving. 1959. The Presentation of Self in Everyday Life. Doubleday.
* Nishida, Kitaro. 1926. “Basho.”
* Ogata, Tsutomu. 1997. Za no Bungaku: Renshūshin to Haikai no Seiritsu. Kodansha.
* Turner, Victor. 1969. The Ritual Process. Aldine.
* Ueno, Kazuo. 2011. “Miya-za Studies: Past and Present—Concept, To-ya System, and Change.” Bulletin of the National Museum of Japanese History 161: 39–60.
* Watsuji, Tetsuro. 1935. Fūdo: Ningengakuteki Kōsatsu. Iwanami Shoten.
* Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). 2026a. Axioms of Generative Topological Ontology: A Foundational Theory of Existential Generation. Research Monograph Series, Version 1.0.
* ———. 2026b. The Limits of Self-Externalization and Existential Generation: Interface Ontology in Generative Topological Ontology. Research Monograph Series, Version 1.0.
* ———. 2026c. Pre-Humanity and Self-Precedence: An Ontology of Self-Verification in Generative Topological Ontology. Research Monograph Series, Version 1.0.
* ———. 2026d. The Ontology of Life as Art. Research Monograph Series, Version 1.0.
* ———. 2026e. A Generative Theory of Force. Research Monograph Series, Version 1.0.

方法論的声明

——研究覚書の公開に関する方法論的声明——

本稿は、生成の位相存在論（Generative Topological Ontology）の継続的な研究過程における研究覚書（Research Memorandum）として公開するものである。
本稿に示される概念、定義、仮説および議論は、執筆および公開の時点における理論的到達点を記録したものであり、最終的に確定された理論を意味するものではない。これらは、今後の研究、芸術実践、現実との相互作用、学術的対話および査読を通して、加筆、修正、再定義または再構成される可能性がある。
本研究は、完成した理論のみを研究成果とみなすのではなく、概念が生まれ、相互に接続され、変容し、理論として統合されていく過程そのものを重要な研究対象として位置づける。したがって、本稿は未完成な草稿というよりも、理論生成の特定の時点を記録した一つの位相として理解されるべきである。
研究覚書の公開は、完成した理論を先行して提示することを目的とするものではない。それは、思考と実践の生成過程を記録し、後の研究による検証および再構成を可能にするとともに、異なる立場との学術的・芸術的対話へ開くための方法である。
本稿の内容が、後に査読論文、学術書またはその他の正式な研究成果として公表される場合、その完成版は、本研究覚書とは異なる固定された文書として明示される。
本稿を引用または参照する場合は、題名、著者名に加えて、版番号（Version）および最終更新日を併記されたい。異なる版の間には、概念、定義および論証上の相違が含まれる場合がある。
本研究覚書は最終的な結論ではない。それは、生成の位相存在論が形成され続ける過程における一つの到達点であり、同時に、さらなる生成へ開かれたインターフェイスである。